

1997 年 7 月

時々、ぼんやりしてしまうことがある。周りで起きていることや、自分がやっていることに精神を集中するのが難しい。

最近はますますひどくなっている。朝起きた瞬間から、何かよくないことが起こるのではないかという予感に打ちのめされることもある。うまく呼吸ができず、手足が冷たい。頭痛がする。

日の出から日没まで、自分がやっていることはすべて、このよくないことを遠ざけるためのものだという気がしている。日を追うごとに、やることは多くなっていく。ひどく疲れる。何一つとして満足にできない。

いつも見られているような気がする。

見られるのは大嫌いだ。

プロローグ

エミールは、自分の管轄するスラムの子どもたちの後を追っていた。真昼の太陽のもとで息切れをしながら、立ち止まることなくシャツの立襟をゆるめる。

子どもたちが、興奮して上ずった声で彼を急かす。

「もうそんなに遠くないよ、エミール神父！」

「こっちだよ、この道！」

「あと少し！」

一歩進むごとに恐怖が増していく。口の中は泥を舐めたようにザラザラとし、錆びた鉄の味がした。

周囲のゴミの海から漂ってくる悪臭は強烈だった。昨晚の雨と照りつける日差しのせいで、ゴミ処分場には湯気が立ち込めている。彼らの周りやその上空に漂う濡れた紙と腐敗物と糞尿の臭いが混じり合った蒸気が、熱を帯びてゆっくりと上っていく。

彼は心の中でつぶやいた。—いつか慣れると思っていたが、そうはならなかった。私がこれに慣れることは決してないだろう。—

ついに彼らは直径 1.5m ほどの小さな空間にたどり着いた。ゴミが取り払われ、その下の堆肥のような古い層が顔をのぞかせている。

「あそこ」子どもの1人が指をさした。

エミールは、その痩せた人差し指で示された方向を見る前から、空気中を漂うゴミの腐敗臭の中に、何か別の腐敗物から発せられる臭いを嗅ぎ取っていた。

小さく痩せた青白い手が、ゴミの下から突き出している。

「マリア様……」彼は小声でそうつぶやき、子どもたちの方を向いた。「すぐに長い棒を持ってきてくれ」

3人の子どものが進み出て、普段ゴミを漁るときに使っている、先が曲がった細い棒を差し出した。彼はそのうちの1本を手に取り、見つけたものの方へ恐る恐る近づいた。

取りかかろうとした瞬間、ゆっくりと揺らめく灰色の恐怖のもやを、子どもたちに対する心配が、光のように貫いた。彼は手を下ろし、子どもたちの方を向くと、ここを立ち去るように言った。

「嫌だよ、エミール神父」まず初めに1人がそう言い、その後大勢が続いた。「僕たちも一緒にいるよ」彼らの顔には、とても大人びた、ある種の静かな決意と共感が見てとれ、エミールを驚かせた。

彼は密かにこの同伴を喜んだ。そしてそれ以上は繰り返すことなく、作業に取りかかった。

—よし、やってやろうじゃないか。—

大きなゴミの塊を次々と掘り返していくと、それは徐々に姿を現した。彼には何なのかわかっていたが、それを覆っている廃棄物がほとんどなくなるまで、目をやろうとはしなかった。

全てが終わると、子どもの全身が現れた。

8歳から10歳の少年に見えるが、エミールには正確な年齢を判断するのは難しかった。というのも、この辺りの子どもたちは栄養失調と病気のせいで、14歳や15歳になっても小さいまま、とても小さいままなのだ。

少年の顔は泥に突っ伏しており、何一つ身に着けていなかった。

その臭いは、今や周囲を漂う腐敗臭の中でもひととき際立っていた。ぞっとするような悪臭が、重くのしかかるように立ち込めている。

丸々とした輝くブルーブラックのビーズのような蠅が、少年の周りをブンブンと執拗に飛んでいる。

エミールには、その後頭部や背中に何の傷や傷跡も確認できなかった。死体に触れるのを恐れて、棒の先端を少年の胸の下に差し入れ、梃子のように使っ

て身体を仰向けにする。死体の重みで、あやうく棒が2つに折れるところだった。

突然、子どもたちの間に奇妙な沈黙が訪れた。それだけでなく、エミールを囲む世界のすべてが沈黙したようだった。近所から聞こえていた音も、ハイウェイを通る車の音も、耳の中で奇妙な低い轟となって消えていった。

最初、仰向けになった子どもの身体は動いているように見えた。それが体内にいる何千もの蛆によるものだと神父が気づくまで、数秒かかった。胸と腹に大きく開いた傷——いや、穴——があった。

心臓が取り除かれ、他の内臓も摘出されている。性器もなくなっていた。

エミールは少年の顔を見た。—お願いします、神よ、顔を見れば、これがかつては人間のものであったとわかりますように。—しかし次の数秒で、少年の顔がないことがわかった。そこには剥ぎ取られた跡があり、ゼリー状の眼球と筋肉のあちこちから突き出した骨が、ひどい状態で残されていた。

何がなくなっていて何が残っているのかを見分けるのは難しかった。

午後の激しい試合でついたのであろう紫がかったかさぶたが、その両膝にあった。

突然、魔法が解けたかのように、子どもたちを恐怖が襲い、彼らはまるでヤギのように飛び跳ねてその場を離れ、叫び声をあげながらゴミ山から逃げていった。

エミールは死体からよろよろと遠ざかり、胃が空っぽになるまで嘔吐した。しかしそれでもまだ足りず、気持ち悪さからさらに吐こうと虚しい努力をし続けた。

目から涙が滝のように流れていく。子どもたちの中で年上の3人が、まだそばにいるのが見えた。彼らはエミールに近づくと、何も言わずにその手を取り、静かに、優しく、ゴミ山から彼を連れ出した。

昨夜は雨だった。血のように赤い空から、滝のような大雨が、数時間にわたり止むことなく降り注いだ。

雨は好きだ。晴れた日とその暑さは、私を気だるく、活力のない、憂鬱な人間にしてしまう。おかしいだろうか。逆でなくてはいけないのだろうか。だが雨が降ると、私は力がみなぎるのを感じる。

雨は人を屋根の下へと走らせる。濡れるのと雷鳴と稲妻とを恐れて、やつらが近くの避難できる場所へネズミのように走る間、私は生きる気力を取り戻す。しなければならないことをするのに、雨は絶好の機会を与えてくれる。

第1章

「ひどい天気ですね」

ガス・サエンスは顔を上げた。ジェロームの濡れた傘から、水滴が幾筋にも分かれて流れ落ちている。屋根を打つ雨音と、ステレオから大音量で鳴り響く音楽のせいで、彼が部屋に入ってきたことに気がつかなかった。

ジェロームは傘をたたむと、ドア横の壁の角に立てかけて周囲を見渡した。「タトはどこですか？」

タト・アンピルは、サエンスの若き解剖助手だ。ミュージシャンになる夢を叶えるため、医学部を4年で中退したが、2年経った今でも、どのジャンルのミュージシャンになるかを決めかねている。

「入れ違いになったんだ」鼻と口を覆っている手術用マスクのせいで、サエンスの温かく深みのある声はくぐもって聞こえている。「お熱いデートだとさ」

「運のいいやつだ。少なくとも温かい場所にいるんですから」

エアコンのきいた室内は、不親切なほど寒い。さらには外の天候も相まって、いつも以上に寒く感じられた。天井の高いラボは、その壁や床、天井にいたるまで、一面が白で統一されている。そして、壁に固定された頑丈な腕木から吊り下がった棚から、部屋の隅に置かれた車輪付きの2台のストレッチャーにいたるまで、ほとんどの器材や家具は、艶のあるステンレススチールでできている。

ドアと反対の壁には、縦1.2m、横1.8mほどのホワイトボードが取り付けられ、そのすぐ近くには、蜂蜜色の木材で作られたパソコン用のテーブルと本棚、キャビネットが一体となった、自作のワークステーションがある。

ワークステーションの中央に鎮座するのは、とても大きなモニターのついた新品の立派なコンピューターだ。サエンスはそれを、日本の財団から得た補助金で購入した。頭蓋骨の写真を3D化することができるため、死体の身元の割り出しに一役買っている。法人類学者にとっては、本来時間のかかる退屈な作業

だったものが、近年のコンピューター技術の進歩によって、短時間で簡単にできるようになった。

『グレイの解剖学』、ボアズやクーン、ラカン、マリノフスキーの著書、ダーウインの『種の起源』、ラントシュタイナーの『血清学的反応の特異性』、コールマンとスウェンソンの『法廷における DNA：鑑定の手引き』が、アステリックスのコミック全巻セットや、黄ばみがかった大量のクラシックギターのスコアとともに、本棚に並んでいる。他にも、光沢紙にフルカラーで印刷されたマグリットやキリコ、モディリアーニの画集や、1995 年にシカゴ美術館で開催されたモネ展のカタログが並んでいる。

部屋のあちこちにある吊り棚やウォール・キャビネットには、サエンスが仕事で使っている器材や備品が、ごちゃごちゃと置かれている。石膏で型取りされた頭蓋骨と歯列の標本には、それぞれ細い紐で紙のタグがぶら下がっている。大きさの異なる蓋つきの標本瓶のいくつかには、変色したさまざまな形の不気味な物体が浮かんでいた。

ここを訪れる人の多くは、この独特なコレクションが丸見えになっている空間で神父と話すことに居心地の悪さを感じる。標本瓶には注目を集める力があり、たとえ絶対に見まいと決意しても、その力に抗うことはできない。

サエンスは、そのときどんな事例を調査しているかによって標本瓶の中から 1 つを選び出し、長い指を絡めて持ち上げると、胸の前で支えて中身を凝視する。そうして何時間も、血管と筋肉と膜組織とをじっくりと観察するのだ。

小さなテーブルの上には、テレスフォロ君——強化セラミック製の人間の胴体の模型で、鮮やかに色づけされたポリウレタン製の取り外し可能な臓器がついている——が、太ももから上だけの身体でまっすぐに立っており、その首なしの頭部には、ニューヨーク・メッツの紺色の野球帽が小粋に乘せられている。彼も同じく補助金で購入したもので、この補助金は医学部の授業で使うための解剖用の模型を扱っているボルティモアの企業から得た。

壁から壁に伝っている洗濯用のロープには、ラボの片隅にある暗室でサエンス自らが現像した写真のネガがずらりと吊り下げられている。

別の壁には、巨大なガラスの額縁に入れられた、レオナルド・ダ・ヴィンチによる解剖図の複製が、4 点かけられている。それぞれ胸部の器官、心臓と主要な動脈、左を向いた頭蓋骨の断面、主要な女性の器官が描かれている。

ジェロームはサエンスを見ると、音楽に軽く耳を傾け、目をぎょろりと動か

した。「R. E. M. ですか？」

サエンスが微笑むと、その目尻にはカラスの足跡のような皺が浮き出した。それは彼が、日頃からよく笑う人間であることを物語っている。「君ならわかると思ったよ」

ガス・サエンスは、180cm を超える長身——今、彼が作業をしている解剖台は、無理に腰を曲げる必要がないよう、身長に合わせた高さに調整されている——で、体脂肪が少なく、しなやかな筋肉がついている。白人とインディオの混血に特有の骨ばった顔つきをしており、ふさふさのウェーブがかった髪は、サイドだけグレーになっている。“ロックスターの髪型”と、ジェロームはよくからかった。

ジェロームは、ステレオの音量のつまみを満足するまで回した。20 年近く経っても、大音量で音楽をかけながら解剖をするというサエンスのこの習慣には、慣れることができないでいた。「こんなことをするには、あなたは年を取りすぎているんじゃないですか？」

ステレオの周りには、CD やカセットテープが山積みになっている。アンドラーシュ・シフとグレン・グールドによるバッハのパーティータや、ジュリアン・ブリームとマヌエル・バルエコによるギター演奏。グレゴリオ聖歌がさまざまなジャンルで人気を博す前に収録された一大アルバム集。それらと一緒に、ザ・クラッシュや、ザ・ドアーズ、ジミ・ヘンドリックス、セックス・ピストルズ、グレイトフル・デッドの曲もある。R. E. M. は最近になって、この検死用レパトリーに加わった。

サエンスは顔を上げ、手術用マスクの下でニヤニヤと笑っている。

「それを言ったらおしまいだろう。君や私が今後セックスすることになっても、年を取りすぎているということはないのと一緒にだよ」

ジェロームは口を開けて目を丸くし、ショックを受けたふりをした。「この墮落者！」

「それはどうも。飲みたければポットにコーヒーがあるよ」

若い方の聖職者は、それを聞くと髪についた水滴を払い落とし、急いでカップにコーヒーを注ぎ始めた。

ジェローム・ルセロ神父は、身長 175cm ほどで、しばしば“引き締まった”や“頑丈そうな”と表現される身体つきをしている。太い腕と広い肩が、細いウエストと尻に流れるようにつながっている。ウェーブがかった髪は短く刈り

込まれ、大きな目は黒に近い色をしている。彼にはある種の凄みのようなものがあり、そのせいで実年齢の37歳よりも年上に見られることが多かった。

歩くときに彼がほんの少しだけ片足を引きずることに気がつくのは、鋭い観察眼を持つ者だけだ。

ジェロームはコーヒーを一口すすると、顔をしかめた。「ううっ、まずい」

「コストカットでね」サエンスはマスクを顎まで下ろした。その手は汚れた手術用のゴム手袋に包まれている。

ジェロームは、年上の聖職者の舌が少しもつれていることに気がついた。「歯の具合はどうですか？」

するとサエンスは顔をしかめた。「その話はしないでくれ」

ジェロームは静かに笑った。サエンスの口の左奥には歯茎に埋もれたまま生えてこない親知らずがあり、本来なら数カ月前に抜いているはずが、先延ばしにしたせいでほとんど腐ってしまっているのだ。歯医者の話になると、サエンスは普段の柔軟で論理的な科学者から、怖がりの駄々っ子へと変身してしまう。

彼は、ジェロームが笑っているのに気づき、顔をしかめた。「ヴォス・ヴェストロス・セルヴァーテ、メオス・ミヒ・リンクイテ・モーレス」

神妙な面持ちを装ってうなずきながら、ジェロームが答えた。「『あなたはあなた自身の道を行くがいい、私には私自身の道を行かせてくれ』ええ、その通りです。ペトラルカが虫歯について言ったんじゃないことは確かですが。もちろんわかっていると思いますが、その歯を放置しておくあなたの身体にとって害になりますよ」

「私の身体にとって害になるのが何なのか教えよう。痛みと、恐怖だよ。それこそが私の身体にとっての害だ」サエンスはうめき声をあげながら背伸びをした。凝り固まった筋肉をほぐすため、肩をぐっと前に突き出し、再び力を抜いてリラックスしてから、すでに最終段階に入った作業に戻る。「どうやら6人目らしい」

ジェロームは、子どもの死体の残骸が横たわっている金属の台までやってきた。背中の下に置かれたゴム製のブロックで死体の胸部は上に反り、検死しやすいようになっている。

「内臓がなくなっているんですか？」

「ほとんどね。心臓もなくなっているし、顔も剥ぎ取られている」

「無駄のない刃さばきですね」ジェロームは腰を曲げ、顔を斜めに傾けて、胸

の空洞を覗き込んだ。「頭蓋骨を？」

サエンスはうなずく。「強烈な一撃だ。骨の損傷を見るに、これは——」

「右側から殴打されたんですね」ジェロームは顔を上げた。「何歳くらいでしょうか？」

「私の見解では、12 歳か 13 歳だな」

ジェロームはステンレススチール製のトロリーから手術用の手袋を 1 組取り、両手に着けた。手首の内側の肌に、ゴムがパチンと音を立てて当たる。彼はすばやく他の損傷部分も調べていった。「性器が取り除かれていますね」前のめりの姿勢になり、むき出しの顎骨の下に引かれたまっすぐな線に人差し指を這わせる。「他の子と全く同じように、顔の皮が剥がされています」

サエンスはうなずく。「顎の下を通して耳から耳へと、綺麗に水平に切られている」

「ナイフについて、わかったことはありますか？」ジェロームはサエンスを見上げた。

「またしても、長さ約 15cm、幅 2.5cm 未満のとても小さな刃物だ。おそらく、手で細かい作業をするために使われるものだろう。非常に鋭利で、滑らかな切り口をしている。それと、顎骨の上に他の被害者と同じ溝がある」

サエンスは手袋を外し、医療廃棄物用のバケツに放り込むと、部屋の片隅にある製図台まで歩いていった。それは、大学のマス・コミュニケーション学部で不要になったのを譲り受けたもので、元々は映画学科の学生たちがアニメーションを描くのに使っていた。中央には、硬い可動式のプラスチックでできた半透明の円があり、その下に電球が設置されている。サエンスはそのスイッチを入れると、プレートの上に 2 組のネガを並べ、ジェロームに見るように促した。

ジェロームはそれに応じ、製図台へと歩きながら手袋を外すと、同じバケツの中に放り込んだ。そして、サエンスがネガの 1 組目の上に掲げた拡大鏡を、目を細くして覗き込んだ。その白黒の写真には、子どもの肉を抉り、顎骨にまで達している細く引っ搔いたような跡が写っていた。

「まだ骨に肉がついているから少し見づらいが、近づいてよく見ればわかるだろう」

この少年とは違い、他の犠牲者の多くは、殺害後、数週間から数カ月してからサエンスの検死を受けている。そのため、皮を剥がされた際に残った肉のほ

とんどが腐敗しており、骨が表面に露出している部分が非常に多かった。骨についた器具の跡も、この犠牲者よりはよく見えていたのだった。

若い方の聖職者は、少しの間レンズ越しに観察した。「傷は長く、深いですね。胴体に使われたのと同じ刃物でしょうか？」

「いいや、あばらに刻まれた傷はもう少し太いものだ」サエンスは2組目のネガの上に拡大鏡を移動させると、ジェロームが調べるのを待った。こちらは、内臓摘出後に残った胸骨と、何本かのあばら骨を写したものだだった。

「カッターの刃先という可能性は？」

サエンスは眉をひそめ、首を振った。「もっと細くないと。もはや、刃物ではないのかもしれないな」彼はジェロームが遺体の方へ戻るのを見ると、ライトを消した。「歯について聞いてくれないか」

「ガス神父、歯についてはどうですか？」

「穴が開いている」

「口呼吸をしていたんですね。他の少年たちと同じように」

他の犠牲者5人のうち、3人の前歯には、肉眼では見えないほどの微小な穴が開いていた。これは、彼らが慢性的な呼吸器疾患のため、頻繁に口呼吸をしていたことを物語っている。彼らは、肉や魚を容易に手に入れることができない家庭で育ったため、食事におけるタンパク質が不足し、炭水化物や、他の柔らかくどろどろとした栄養価の低い食べ物に依存していた。タンパク質の欠乏は、彼らが10代になっても体が小さいことの原因でもあった。

「性的暴行の痕跡は？」

「ないね」

ジェロームはうなずく。「しかし、性器は切除されています……。これに関しては、まだ納得する答えが出せていません」彼は、異常心理学を研究していた頃に出合った数々の症例報告や臨床評価を思い返していた。「性的な葛藤のようなものがあるに違いないんです」そう言うと、ジーンズのポケットに両手を深く突っ込んだ。「死亡日時はわかりますか？」

「この子が発見されたとき、身体中に蛆が這っていた。湿度が高く、地面は濡れていたから、私は2、3日経過していたと見ている。長くて4日だが、可能性は低い」

サエンスはデスクに向かうと、読書用の眼鏡をかけ、クリップボードを手に取り、目を細めて染みのついたカーボン複写紙に印刷された書類を読み始めた。

「他の子のときと同じく、遺体の周りには血痕がほとんどなかった」

「そこから考えられるのは……」

「この子は他の場所で殺されたということだ。それがどこであるにせよ、大量の血が流れたはずだ。つまり、人目につかない場所でなくてはならない——風呂場やガレージのような。それに、疑われるのを避けるためには、犯人は遺体を捨てる前に服を着替える必要があっただろう」

ジェロームは片手で顔をこすると、少しの間その手を口に当て、ホワイトボードの方へ向かった。サエンスも後を追った。

ボードのいちばん右側の列の上には、“6”という文字が書かれている。いちばん左側の列には、上から年齢、性別、発見された日付、死亡推定日、損壊状況というカテゴリーが並んでいる。

「この遺体が発見されたのは、今月の7日です」ジェロームはそう言うと、マーカーを手に取り、“死亡推定日”と書かれた行の右端にある空白を見つめ、数を数えるようにボードを叩き始めた。そしてサエンスの方を振り返る。「ここに入る数字は何でしょう？」

「法医学者によれば、いちばん可能性が高いのは5日だそうだ」

ジェロームはホワイトボードに向き直ると、空白に“7月5日”と書き込んだ。そしてマーカーの蓋をはめ、ホワイトボードの縁(へり)に戻すと、後ろに下がった。そのとき、サエンスがボードを凝視していることに気がついた。眉間に皺が寄るほど集中しているようだ。

「何かおかしいことでも？」

サエンスは、突然何かをひらめいたようだった。「我々は今まで、日付に注目していたね」

「ええ」

彼は長い手足を慌ただしく動かしながら、急いでボードのそばを離れ、デスクへと戻った。そして、そこら中の書類やフォルダやガラクタの山をかき分けると、目当てのものをを見つけ出した。「もしかすると、もっと曜日に注目すべきだったのかもしれない」そう言って卓上カレンダーを持ち上げた。

ジェロームはすぐさま、彼が何をしようとしているのかを察した。「わかりました」すばやくホワイトボードに向き直る。「始めましょう。最初の少年が見つかったのは2月2日。法医学者によると、死亡推定日は前日の夜か日中です」

「2月2日は日曜日だ。死亡推定日は土曜日」

ジェロームは、日付の下に曜日を書き込んだ。「2人目の少年は——3月3日に発見されています。死亡推定日は1日」

「3日は月曜日だ。死亡推定日は——土曜日」

ジェロームは、先ほどの右隣に書き込んだ。「3人目の少年は——4月6日に発見されています。死亡推定日は前日の夜か日中です」

「日曜日と——土曜日」

「4人目は——5月5日。死亡推定日は、3日です」

「月曜日と——土曜日」2人はこの事実を飲み込もうと、少しの間動きを止めた。その後、サエンスが言った。「続けよう」

「5人目の少年は——6月10日に発見されています。死亡推定日は7日です」

「火曜日と——土曜日だ」

「そしてこの少年は——今月の7日に発見、死亡推定日は5日です」

「月曜日と——土曜日だ」サエンスはカレンダーから顔を上げ、ボードに書かれた新たな手がかりを吟味した。「犯行は、2月から毎月、最初の土曜日に行われているんだ」

エミールは、サエンス神父の学部オフィスに座っていた。

室内の身に染みる寒さの中、彼は靴の中の靴下の湿り気と、ズボンの足首から下についた泥汚れをはっきりと感じていた。両腕を胸の前で交差し、指はしっかりと脇にはさんでいる。

外の嵐は激しく、政府は台風2号が首都マニラを含むルソン島の一部に上陸したと発表していた。キャンパス内の木々の枝は、風によってあらゆる方向へしなっている。窓ガラスには雨が打ち付けている。無地や花柄や模様の入った傘が、ガラスのすぐ向こうにひょいと見えたり、隠れたりしている——荒れ狂う嵐に捕まった者がいるようだ。

ドアが開いた。ガス・サエンスが、風で裏返ったびしょ濡れの傘と格闘しながら入ってくる。ジェローム・ルセロもそのすぐ後からやってきたが、彼の傘はいくらかましな形を保っていた。

「ああ、エミール、長らくお待たせして申し訳ない」サエンスはそう言いながら、両手を前に出して歩み寄ると、温かいが濡れている手で教区司祭の手を包み込んだ。

「大丈夫です、サエンス神父。ルセロ神父」

サエンスは2本の傘を持つと、水を切るために、部屋の隅にあるプラスチックのバケツに入れた。「コーヒーでも？」と、エミールに尋ねる。

「ええ、お願いします」

エミールは、コーヒーがたっぷりと注がれたカップを喜んで受け取った。そして一口すすると、冷まそうと息を吹きかけた。

「いい大型台風日和ですね」椅子を引きながらジェロームが言った。「あなたの地区では、授業は休講になったんですか？」

エミールはうなずく。「今朝早くに。生徒の半分はすでに登校していたんですが」

ジェロームは不満そうに鼻を鳴らした。「はあ。あなたも、ここ数年の経験で、今日は休校になると生徒たちもわかっていると思っていたのでしょうか。今朝まで台風が来るのを知らなかったわけでもないでしょうに」

サエンスはデスクの向こう側に座ると、エミールの方を向き、「それで」と彼を促した。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。